

**男女共同参画標語
 最優秀賞**
**「男女とも 歩みあわせて
 輝くとりで」**
 宮下拓也さん 藤代南中学校(当時)

37号
 平成27年3月1日発行

風

 優秀賞
 学生の部
 「同じだね 働く力と 支える心」
 「認め愛 支え愛 補い愛」
 「男女の手 大きき違えど 価値は同じ」
 一般の部
 「女の手男の手 合せた未来 取手から」
 「役割を 担う意欲と 任せるゆとり」



4人の話に引き込まれたトークイベント

もう1人の女性ゲストは、僧侶の太田皓弓さん。30代の若さで、弟さんとともに寺を切り盛りしています。千葉さんと同様、太田さんも始めから僧侶を志していたわけではありません。地域によっては女性僧侶に対する偏見もあり、住職であるお父様は、跡を継がせる気はなかったそうです。しかし、太田さんは

「輝く秘訣①
枠や限界を作らない
 経歴も職業も様々なトークイベントのゲスト。弁護士の子葉真理子さんは、子育てをしながら弁護士としての道を切り開いた経歴を持ちます。結婚を機に退職し、将来に備えて司法書士の資格を取ったのが、法律の分野に足を踏み入れたきっかけ。その後、法科大学院制度導入とともに司法試験に挑戦しました。もちろん、子育てをしながらの勉強は大変だったそうですが、飄々と話す千葉さんはそんな苦労を微塵も感じさせません。「目の前のチャンスにチャレンジしているだけ」と、むしろ楽しんでいく様子さえ見えました。

「輝く秘訣②
信じる道に一途
 彫刻家の島田忠幸さんは、各地のプロジェクトや創作活動で数多くの作品を手掛けています。芸術を一生の仕事と言いつつ、島田さんですが、家族を養うために二足のわらじを履いたこともあったそうです。芸術家という自分の世界で黙々と創作に向き合うイメージがありますが、島田さんの作品には多くの人が関わり、非常に社会的な強さを感じます。今回紹介された「舟プロジェクト」もその一つ。利根川とともに発展した取手の歴史と文化をしのびつつ、人と人の絆や地域のつながりに思いを巡らすことができます。

「輝く秘訣③
人と人の関わり
 たくさんの人が参加し、協力して成り立つ「とりでの集い」。ダブルダッチ(縄跳び競技)で活躍する「ディアナ」は、高校生から社会人の女性4人から成るチーム。閉会ぎりぎりまで、会場の声にこぼれて演技してくれました。オペラ歌手として学校公演や講師などで活躍する結城滋子さんは、会場とともに歌える曲を織り交ぜ、音楽を通して交流する素敵な場を作ってくれました。カフェコーナーを任されたガールスカウトの皆さん、蕎麦を振る舞うとりでそば愛好会の皆さん他、サポートスタッフも、1人1人が生き生きと輝いていました。そこに共通するのは、「喜んで(楽しんで)もらいたい」という想い。詰まるところ、人を輝かせるのは、思いやり、人との関係なのかもしれません。

と謙遜する霜多さんですが、欧州を旅しているときに学んだ栽培技術を独自に発展させました。安心安全にこだわり抜いた野菜やハーブは、いま有名レストランやホテルで引張りだこです。自らの信念を貫き通す一徹さの一方で、会場を笑わせるユーモアと親しみやすい人柄が印象的でした。

島田さんと霜多さんともに信念を実現する道を仕事とし、その道を一途に突き詰めています。と同時に、その信念を社会へ積極的に発信しています。

限られた時間の中、ゲストや参加者の人柄がにじみである場面が多々あり、目から鱗が落ちるような気づきを得られる楽しい「集い」でした。200人を超えた来場者は、きつと何かしら得るものを持ち帰られたのではないのでしょうか。(下園)

浅野さんは、今後多くの人の考えを持つ人と関わりながら自分を成長させたいという思いを強く持つようになったそうです。また、茨城県の歴史を改めて学ぶことで茨城県の魅力をPRしていきたいと思っているそうです。

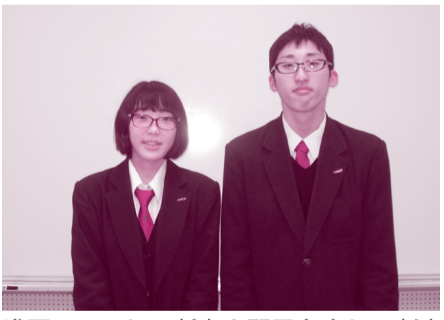
門馬さんは、千葉県在住ですが、実行委員となって茨城県に関する情報を気にするようになり、茨城県に興味を持つようになったそうです。様々な人との関わりの中で自分の視野が広がったことが大きな収穫だったようです。また、イベントの企画・運営に関するボランティア等は今後も続けていきたいそうです。

「第18回女と男とも輝くとりの集い」レポート

**全国高等学校総合文化祭実行委員として活躍！
 取手一高生 今どきの高校生、輝いています！**

県立取手第一高等学校三年生 浅野ひかるさん、門馬空斗さん

第38回全国高等学校総合文化祭茨城県実行委員会の委員として活躍した県立取手第一高等学校の3年生、浅野ひかるさん、門馬空斗さんに、実行委員として得た経験や今後の目標などについてお話を伺いました。ふたりとも、自分の意見をしっかりと主張し、他の意見を聞き入れて考えることができる向上心を持った高校生です。



浅野ひかるさん(左)と門馬空斗さん(右)

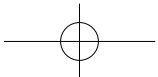
感は格別だったそうです。浅野さんは、おもてなし委員会に所属し、各会場に参加者の案内や説明を担当しました。以前から人と接することが好きであったため、多くの方々と接することで様々な意見や考えを聞くことができ、とても有意義だったそうです。

実行委員になることは、生徒会に所属するふたりは、以前から生徒会としてボランティア活動をやっていました。県からの実行委員のボランティア募集の案内を見て高校2年生の5月から、自ら志願して参加しました。全国高等学校総合文化祭は47都道府県を持ち回りに催は47年に1度となります。平成26年夏の開催時に、茨城県内の高校に在籍中であるという絶好の機会を逃したくない思いで参加しようと思ったそうです。実行委員となり、改めて全国規模の総合文化祭のスケールの大きさを実感し、不安にもなりましたが、やり遂げたときの達成感

門馬さんは、千葉県在住ですが、実行委員となって茨城県に関する情報を気にするようになり、茨城県に興味を持つようになったそうです。様々な人との関わりの中で自分の視野が広がったことが大きな収穫だったようです。また、イベントの企画・運営に関するボランティア等は今後も続けていきたいそうです。

浅野さんは、今後多くの人の考えを持つ人と関わりながら自分を成長させたいという思いを強く持つようになったそうです。また、茨城県の歴史を改めて学ぶことで茨城県の魅力をPRしていきたいと思っているそうです。

浅野さんは、今後多くの人の考えを持つ人と関わりながら自分を成長させたいという思いを強く持つようになったそうです。また、茨城県の歴史を改めて学ぶことで茨城県の魅力をPRしていきたいと思っているそうです。



シリーズ No.23

企業訪問

夢に向かって 女性自動車整備士

株式会社ナオイオート勤務 吉井詩季さん(25歳)

最近、運送業などで女性ドライバーをよく見かけますが、トラック・タクシードライバーの女性割合は2%台です。自動車整備業界でも同様に女性割合は低いようで、これには自動車整備士は、力仕事などのイメージから男の職場と思われがちです。しかし、近年、自動車の電子化等により作業内容が変化したことや、女性特有のきめ細かな対応による顧客対応サービスの向上等から、女性の自動車整備士にあらためて注目が集まっています。



職場の整備士の皆さんと吉井さん

今回は、作業現場において、女性整備士の方を訪問し取材させていただきました。明るく優しい印象の女性で、楽しい雰囲気の中でお話を伺うことができました。

農業系大学から自動車整備士を目指す

高校卒業後、農業に興味を抱き北海道の農業系大学に進学し馬の遺伝子研究を専攻してきました。一方で、生活する上で車は不可欠で日常的に利用してしま

た。使用頻度が高いこともあり、修理・故障も多くその都度修理に出していましたが、修理内容請求料金内訳についての業者説明が不十分で、車に素人の自分には理解できないことがありま

た。今年で、入社3年目になります。配属当初は、自分には体力的に無理かなと感じていましたが、2ヶ月経過した頃、整備

の仕事を出来るようになった自分を発見した時が最初の喜びでした。その後お客様から修理のリピート指名を受けた時に更なる喜びを実感しました。

「現在の職場は、自動車整備士は5名、うち女性整備士は私1名ですが、会社全体では女性希望者が2、3名いるようなので私自身がパイオニア的存在となつて女性参画の道を開いて行きたい。そのためには、私自身が腕を磨かなければならないと自覚しています。現在3級自動車整備士資格を保有していますが、より幅広く仕事ができる2級資格を目指して勉強中。資格取得は2年以上の実務年数に加えて、実技・学科試験に合格する必要があります。幸いにも、会社には支援制度があ

自動車整備士としてのやりがい

り、研修を受講できるような勤務時間体制に変更してもらったり、受験費用を会社が負担してくれる等の優遇制度を受けられるので活用していきたい。そして将来的には、結婚、出産などがあっても、自動車整備士として腕を磨きながら、頑張っていきたい。」と夢を語ってくれました。

会社として女性進出をサポート

女性が働きやすい職場づくりに会社も積極的に取り組んでいます。本社・総務課を訪問し、女性管理職の岡田総務課長さんから説明いただきました。そして自分自身が育児をしながら勤務してきた当時の経験話を交え、会社として子育てと仕事の両立ができるように産前産後、育児休業、育児短時間勤務など制度の充実を図ってきたことを

国境を超え、縫製技術指導で自立支援

遠くアフリカのルワンダで経済的自立をめざす人々に縫製技術を指導している青年がいます。

彼の名前は、鈴木掌さん(27歳) 将来を決めた革ジャン

鈴木さんは取手松陽高校在学中進路を決めるにあたって、趣味のブレイクダンスを極めるか、好きな絵を学ぶか、それとも美容師になって母親の経営する美容室を継ぐか悩んだそうです。その彼をファッションの世界へ導いたのは、取手市の姉妹都市ユーバ市でのホームステイの経験でした。その時学んだコミュニケーションの大切さとユーバ市で出会った人から頂いた一着の革のジャンパー。お気に入りとなったその皮ジャンが

彼の将来へ大きな影響を与えました。その後鈴木さんは、服飾専門学校でデザインを学び、卒業後は同校で教員助手を勤める傍らフリーデザイナーとして活動しました。その経験を生かして2011年から国際協力機構(JICA)の青年海外協力隊員としてルワンダで縫製の指導を2年間行うことになりました。

ルワンダでの活動

同国は21年前の1994年に大虐殺が起きて以降、現在治安は安定しているものの依然貧困

率が高く、文字の読み書きや計算が出来ない人も少なくない状態で、全くのゼロからのスタートでした。ルワンダ北部の職業訓練校ではハサミや針など備品も足りず、30台ある足踏みミシンの中でまともに動くのは3台のみという環境でした。それでもやる気のある生徒には放課後にも指導し、やがて青年海外協力隊の2年の任期が終わるころ数人が彼の片腕となり、弟子と言う形で訓練終了後も学び続けました。

青年海外協力隊員の任期が終了し、日本に帰国したところ、特定非営利活動法人リボン・京都からルワンダで洋裁プロジェクトが始まるのを掛けられました。同法人は京都に本部を置き、ラオス、ベトナム、ヨルダンなど途上国で日本全国から寄贈された絹100%の着物

を教材に、長年に渡り洋裁指導を通じて女性の自立支援を行っており、『外務省日本NGO連携無償資金協力事業』が、ルワンダの首都キガリで洋裁指導プロジェクトを開始するために派遣する日本人洋裁専門家を募集していました。鈴木さんは、JICA時代にルワンダでやりきれなかった整った環境で高い洋裁技術指導を行いたいという思いや、将来ルワンダの人々と共に働き、世界に通用するファッションブランドを立ち上げること

を夢見て応募し採用されました。再びルワンダの地を踏み、首都の職業訓練センターで洋裁指導が始まりました。今度は13台の電動工業用ミシン、訓練用の着物生地、現地生地、針、糸、洋裁道具など、洋裁資機材が豊富にある指導環境でした。

現地の人々は貧しい生活状況を変えるため、洋裁を学びたいという意欲が強く、1年目の50名の訓練生募集に150名の応募、2年目の訓練生募集には600名の応募があり、現在訓練2年目の真ん中に差しかかっているところだ。国際機関、国際NGOレベルではルワンダでは初めてと言われる電動工業用ミシンによる訓練はルワンダでも注目を集めており、期待されている分プレッシャーも大きいですが、着物地や現地の布を使って質の高い洋服を作れるよう指導しています。



ミシン指導の鈴木さんとルワンダの生徒の皆さん

編集後記

アフリカのルワンダからの記事は如何でしたか、人は外見ではなく中身ですと言いますが身なりや身だしなみは大切です。やる気や意欲も身なりや姿勢に現れると言われます、中身を外見で変えられるのであれば身なりや身だしなみに気を配っていきなさいと思います。(平塚)

「風」を一緒に作りませんか

この男女共同参画情報誌「風」は、市民編集員の方と取手市が協力して企画・取材・原稿作成・編集などを行います。「風」の発行にご協力していただける編集員の方を募集します。取手市市民協働課までお問い合わせください。(問い合わせ先は左参照) 応募お待ちしております!

発行日 平成27年3月1日
編集発行 取手市 市民協働課
平塚恒夫/下園淳子
土屋雅則/河口優子
〒302-8585
TEL 0297-74-51139
FAX 0297-74-2141
H・P http://www.city.toride.niigata.jp/s-shien@city.toride.niigata.jp/ 表紙絵 有本 唯